

二階のかいじゅう

仙台市立富沢中学校 三年

宮田 ちぐさ

曾祖父の家が解体された日、母は二階を見つめて、長年住んだ部屋を懐かしむように、寂しさをこらえるように、ぼつりと言った。

「むかしね、二階に怪獣がいたんだよ。」

九人家族で育った母。母と祖父母と伯母二人、曾祖父母、それに曾祖父の姉。母たちが成長するとさすがに手狭になり、親子で近所に越してからは、曾祖父母と曾祖父の姉がこの家で暮らしていた。

月日が流れ、曾祖父母たちは施設に移り、病院に入院し、そして旅立って行ったが、幼い私の取り留めもない話に付き合ってくれた笑顔や、撫でてくれた手の温もりは、今も鮮明に思い出せる。が、怪獣がいた記憶などない。そもそも、怪獣なんて存在しないだろう。怪獣ってどういうこと。

母が友達と遊んでいると、どこからかうなり声が聞こえてくる。留守番中にドンドンと床を叩く音がする。気になって覗きに行くと、近寄ってはいけないと怒られる。二階の部屋には怪獣が住んでいる。幼い母はそう思ったそうだ。近寄ってはいけない、何かがいる。

ある日、曾祖父が倒れた。

高齢で身体が弱り、しばらく入院することになった。家には介護の話をしたくさんの方が出入りするようになった。曾祖父が在宅できるように、環境を整えている。そう思った数日後、二階の、あの閉された部屋が開いていた。びっくりしておそるおそる覗きこむと、そこには曾祖父によく似た別のおじいさんが横になっていた。曾祖父の弟だった。出生時に産婆が手を滑らせ床に落ち、身体障害と知的障害が残った弟だ。障害者がいる家と後ろ指を差される時代。曾祖父の弟は、長い間家でひっそり暮らしていた。部屋を移動させて介助することができず、学校も社会も知らない。うなり声は、精一杯のおしゃべり。床を叩く音は、唯一の人を呼ぶ手段。怪獣なんかじゃなかった。初めて見る孫姪を、不自由な体で喜んで迎えてくれたそうだ。壁を一枚隔てた隣。ずっと怪獣がいると怯えていたけれど、その自分の方がかいじゅうだった。母はそうつぶやいた。

時代が悪かった。そう言って片付けることは簡単だ。福祉制度に明るい家族もおらず、食べていくことが大変な時代。狭いながらも一部屋を与えて介助していくことで精一杯。障害児を持つ家族の葛藤もあっただろう。周囲の理解や協力もない中で家族ができた最大限の結果だったと思う。

けれど、それで閉された可能性のなんと大きなことだろう。固まった手足は、少しでも動いたかもしれない。曾祖父母らしか判断できない発声は、会話につながったかもしれない。開いた部屋で曾祖父の弟は、ヘルパーとの交流を楽しみに毎日を過ごすようになったそうだ。その機会が長年奪われていたということ、家族なのに知ろうとせず、怖いと目を背けたそのことが、きつと母の後悔なのだろう。私もおぼろげにしか記憶にない曾祖父の弟。人が好きで、面会に行くときと全身で喜びを表現してくれたように覚えている。

もし、現代だったらどうだったのだろう。機能回復の訓練を受け、曾祖父母と同じように私と歌ったり、手拍子をしてくれたり、撫でてくれたりしたのだろうか。友人をつくり、何気ない日常を楽しんだのだろうか。

今は曾祖父の弟も亡くなってしまったけれど、もつと何かできることがなかったのかなと悔しく思った。私たちは、今健康に暮らしている。けれど、この生活は永遠には続かない。年をとれば体が動かなくなる日が来るし、病気の後遺症に苦しむこともある。障害を持って生まれなくても、同じような状態になることはある。障害があってもなくても、その人がその人らしく暮らせる社会の実現。それは、私たちの世代が乗り越えていかなければならない壁なのだと思う。自分と違うものを排除しようとする心、知らないものへの恐怖心はなくなるならない。しかし、これからの未来のために、私たちは少しずつ変えていかなくてはいけない。誰にでも優しい社会でなければ、誰も安心して暮らすことはできないからだ。

だから、障害について知ろうと思う。知ろうと声をあげようと思う。怪物にされる人が、いなくなるように。かいじゅうになる人が、いなくなるように。みんながみんな、自分と違うということ、それが当たり前と思える、人の多様性を受け止められる世の中の実現。きっとそれが、曾祖父の弟のために私ができることなのだと思う。

更地になった、曾祖父の家。

新しい家が建ち、別の家族が住んでいる。

曾祖父の弟が介助されていた、母の、母たちの後悔が詰まった部屋は、もう無い。

母が、ゆつくりと歩きます。

行くよ、と声がかけられる。

さようなら二階のかいじゅう。

宮城県人権擁護委員連合会長賞

僕はスカートをはかない

学校名・学年・氏名

非 公 表

僕がスカートをはかないのは、単なるワガママなんかじゃない。

みなさんは、トランスジェンダーというものをご存知だろうか。トランスジェンダーとは、生まれた時の性別と心の性別が異なる人のことだ。「性同一性障害」とも言われており、世界人口のおよそ1パーセントがそれに当たるそうだ。

僕も自分の性別に違和感を感じていた。自分がそのトランスジェンダーなのかは分からないが、女性だというのに昔から男の子用のおもちゃやメンズファッションに強い憧れを抱いていたし、自分が「男性らしい」格好でいる方が自然だとまで思っていた。それに何より、自分が女性であるということがとても嫌だった。

中学校の入学式を、僕はスカートをはいて出席した。本当はストラックスが良かったのだが、普段の学校生活ではストラックスで良い代わりに、入学式と卒業式ときはスカートで出席すると家族と事前に約束していた。だが、僕はすごくすごく嫌だった。スカートをはくということは、僕にとって自分を丸ごと否定されているのと同じことだ。式の最中、僕は涙をこらえていた。男性として生まれたかったと何度も何度も思った。

もしそうだったら、いつでも自分の好きな服装でいられるのに、と。

しかし、翌日になるとそんな考えもうすれていた。スラックスをはいて登校できるのがとても嬉しかったからだ。やはり僕にはスラックスの方が合っている。そして、これこそが「僕」という人間なのだ実感した。僕は女性として生きるよりも男性として生きる方が合っている気がした。

だが、そんな僕をまわりの人達は、理解してくれていないようだった。

「なんでスカートをはかないの？」

「女の子らしくないね。」

そんな言葉をかけられることが多々あった。また、僕が女性として扱われたくないと分かっているからかわれることもあった。その度に僕は胸が苦しくなった。

僕が普通ではないことは分かっていたが、そんなに理解されたいものなのか。そう思った僕は、トランスジェンダーについて少し調べてみた。

最初にも軽く説明したが、トランスジェンダーとは心と体の性別が一致しない人のことだ。ではなぜそんな現象が起こるのか。実はまだ解明されていないらしい。遺伝子が関係していたり、胎児期に体や脳に異常が生じた結果だったり、さまざまな説があった。

では、トランスジェンダーはどのくらいいるのか。なんと世界に二千五百万人もいるという。また、日本で戸籍の性別の変更をした人は、二〇一九年時点で累計一人を越えている。そしてそれは年々増加しているらしい。

これらのことを調べているとき、ふと「自殺」という言葉が目に入った。少し気になり調べてみると、トランスジェンダーの六割以上の人が自殺を考えたことがあるという。詳しくは分からないが、このような事実の背景にはきっと周りの人が関係しているのだと思う。僕は、その人達の辛さを容易に想像できた。僕が

好んで男性らしくふるまうことに、家族や友達はあまりいい顔をしていなかった。否定的な言葉をかけられたこともあった。そこまで攻撃的な言葉をかけられたことはないが、悩んだり、傷ついたりしたこと多かった。それがヒートアップすれば、自殺を考えるのも無理はない。では、どうしたらそのようなことが起こらない世の中になるだろうか。

僕は、知ることと知ってもらうことが大切だと思う。世界には到底理解できないような価値観を持つ人がたくさんいる。そのことをまず知ること。そして、自分のことを理解できない人もいる。だから、自分ほんんな人間なのか知ってもらうこと。完全に理解することやしてもらうことは不可能かもしれないが、少しでも知っていれば、傷つけることも傷つくことも減るんじゃないか。しかし、そのためには行動をしなければならぬ。それは決して簡単なことではない。

少し前まで、僕は自分を出すのが怖かった。きっと誰も理解してくれないし、それで傷つきたくないからと、知ってもらうことをあきらめていた。しかし、このまま自分を隠しても何も変わらないんだと気が付き、徐々に自分を出せるようになっていた。まだ出せていない部分も多いが、それも少しずつ人の前に出していけるよう今も奮闘中だ。そして、いつか堂々と自分らしい姿でいられるようになりたい。多くの人に、本当の僕を見てほしい。

人権とは、誰もが幸せでいるための権利。だから、どんな人でも自分らしく生きていい。

僕は僕らしく生きていく。だから僕はスカートをはかない。

差別のない世界に

登米市立南方中学校 三年

星^{ほし} 萌^も 花^か

あなたは「体の不自由な人、障がいを持っている人」と聞くと、どんなイメージを持つだろうか。障がいは見ただけで分かったり、周囲の人とのコミュニケーションが難しかったりといういろいろな特徴があるため、いろいろな分野に分類されるそう。また、障がい者であるために差別の対象になったり、いじめに苦しんでいる人も少なくないという。

だが、「麻痺」という言葉からは、どのようなイメージを持つだろうか。意外と身近でない存在だという人が多いかもしれない。障がいと違うところは、生まれる前後でどこかに傷がついたり事故にあったりとなんらかの原因によって体のさまざまな部位が動かしにくくなったりすることだ。反対に、障がい者と似ているところもある。それは、普通とは違うという理由で差別やいじめに苦しんでいる人がいる、ということだ。

今からおよそ七年前。私のような中学三年生がまだ小学二年生の頃だ。八月、私の妹は生まれた。少し早く生まれてしまったが、念願の妹誕生は、私にとっても家族にとっても大切な出来事となり、そのときの嬉しさは今でも鮮明に覚えている。だが、それとは裏腹にひどく驚きを受けたことがあった。それは、未熟児

として生まれてしまったことで「脳性麻痺」があるということだ。なんで、妹が？私も家族も驚きを隠せずていた。

後で調べたら、脳性麻痺の障害は主として運動発達が遅れるかうまくいかないかといったことらしい。実際に私の妹は右足の足首が硬く、かかとをつけずやや爪先立ちで足をひきずるように歩いたり走ったりしている。他にも、じっと立っているときにフラフラしてしまったり、ジャンプができるようになったのもつい最近だ。治療のために何年も前から今でも通院している。装具を付けて生活していた時期もあった。毎晩、お風呂からあがって寝る前にはストレッチをしている。普段から、かかとをつけてと注意したりもしている。だいぶ歩き方は良くなってきたが、心配なことがある。前にこんな二つの記事を読んでから、その不安は一層深まっていった。

一つ目。その方は妹と同じく脳性麻痺を患っている。知的な遅れはなく日常生活もあまり問題はないため普通学級へ進学したところは妹と同じだ。だが妹は、運動面ではサポートが必要なため体育が通級である。その方は通級ではなかったそうだが、爪先歩きだったという。クラスメイトからは「歩き方が変」と言われることが多くそのたび傷ついていたそう。中学校へと進学したときのこと、クラスメイトからの「麻痺は言い訳」という一言からいじめが始まった。

二つ目。その方は発達障害を患っている。運動は苦手だが、学習面での成績はいいというところは妹と同じだ。もともといじめられがちだったそうだが、ある程度の居場所があった、と語っている。小学四年生のあるときに担任の先生に標的にされてからいじめや虐待が始まり、徐々にエスカレートしていったことだった。

読んでいるだけで恐怖を覚えた。私が率直に思ったのは、学校で得た知識は人を傷つけるためのものではないということだ。成長していくにつれいじめが起きたり、エスカレートしていついてるのが、二つの記事

の共通点だ。妹はまだ一年生だから大丈夫ということではなく、これからそうなるかもしれないと思った。病院の先生から手術をすればクラスの皆と同じように歩けるようになる、と言われたらしい。一つ目の記事の方がこの治療を受けたらどうなっていただろう。だがそれは脳性麻痺を治すものではなく、爪先歩きを治すものだ。「歩き方が変」と言われて傷ついた心は足とともに治るものだろうか。個人的にいじめはそれの素となった麻痺による歩行が改善されれば全て終わると思っっている人がいるのではないかと思う。いじめは終わっても終わらない、ということ全体の人たちに知ってもらいたいと思う。そしてもう一つ。何の障害も麻痺もなく健康な体で生まれたみなさんは、麻痺を持った方々や障がいを持った方々をどこか人ではないものを見るような目で見ていないだろうか。もしそのような人がいたら、皆同じ人間であるという気持ちを持ってほしいと思う。そして、無意識の勝手なイメージを捨てるべきだ。

障がいは病気ではない。そして、麻痺も病気ではない。病気ではないから治ることはない。麻痺は言い訳ではない。治らないのだから。

私は望んでいます。妹がいじめに苦しむことがなく、これからも笑って暮らすことを。彼らは一番に望んでいます。障がいの有無に関わらず、皆が同じ人間として暮らしていくことを。

NHK仙台放送局賞

生きることは幸せか

栗原市立築館中学校 三年

中村 伊吹
なかむら いぶき

私は祖父のことが大好きです。祖父は、いつも優しく、いつも笑顔で、いつも家族の幸せを願っているような人です。私が赤ちゃんの頃には、毎月遠くから来てくれたそうです。そんな祖父のことが私も家族も大好きで、こんな日々がずっと続くと思っていました。

しかし、現実はそのなに甘いものではありませんでした。私が学校から家へ帰ると、母が神秘的な面持ちで立っていました。そこで私は祖父が倒れたことを知ることになります。救急車で運ばれたこと、すぐに入院することなどいろいろ言われましたが、中でも頭からはなれなかったのは、

「もう先は短いかもしれない」

という言葉でした。私は今まで身近な人が亡くなったことがなかったので、とても困惑しました。複雑な感情が頭の中をグルグル掻き回す中、最初に浮かんだ願いは、

「死なないでほしい、ずっと生きてほしい」
でした。

程なくして、お見舞いへ行くことが決まりました。新幹線に乗ってる間も、病院に行くタクシーに乗っている間も、祖父が死ぬのは嫌だということだけを考えて時間が経つのを待っていました。ようやく病院へ着くと、そこには信じられない光景が待っていました。ビジネスホテルの一室のような病室の中には、痩せ細っている老人が一人ベッドに寝ていました。本当に祖父なのか疑うほど弱々しくなっていました。いつもの明るい笑顔はもろろなく、衰弱しきった目で私を見て、ほとんどつぶれている喉を一生懸命震わせて私に言いました。

「辛い。もう死にたい」

と。祖父は泣いていました。気づけば私も泣いていました。祖母も泣いていました。父も、母も、弟も泣いていました。

数週間後、祖父は永い眠りにつきましました。祖母と実の息子である父に見守られて、本当に眠るように旅立たそうです。

私はというと、祖父の言葉をずっと、葬式が終わってからもずっと考えていました。

「辛い。もう死にたい」この言葉を私たちに伝えたのは、単に治療が辛かったからではないと思います。自分のせいで家族に迷惑をかけているのではないだろうかと考えたり、自分の思いを上手く伝えられなかったりと、優しい祖父だからこそ葛藤があり、思わず口に出してしまったのだと私は思います。このことに気づいたと同時に、自分の愚かさを呪いました。なぜなら、私が祖父に願ったことは「死なないでほしい、ずっと生きてほしい」これは祖父の幸せを願ったのではなく、祖父が死んで「自分が」悲しむのが嫌で願ったものだったからです。私は「幸せ」とは何か分からなくなりました。自分のための「幸せ」家族のための「幸せ」正しさとは何でしょうか。正解はあるのでしょうか。

答えが出ないまま何日も経ちました。私がふとテレビを見ると、「安楽死」について取材している番組がやっています。番組内では、日本では安楽死が認められていないこと、スイスなどの海外では認められている国や地域もあること、日本人がスイスへ行き実際に安楽死をしている様子などが放送されていました。番組内の日本人は一生治らない難病で、じきに死ぬことを自分でも理解していたため、最期は自ら、笑顔で亡くなっていました。その日本人にとって幸せだったのでしょうか。ただ、家族が本心から賛成したのかは、私には分かりません。私は今まで、「安楽死」という言葉自体は知っていましたが、身近なものでもないため、深い意味は知りませんでした。ですが、この番組を観てからは、安楽死について深く考えるようになりました。

私は、祖父が死にたいと言った後に、安楽死で最期を迎えたいと言ったら、自分はどうか考えるのか考えてみました。祖父は祖父自身のためではなく、私たち家族のために安楽死を選択するかもしれません。それなら、私を含め家族は止めるでしょう。では祖父の意識がなかったらどうするでしょうか。実際、祖父が亡くなる五日前から、祖父の意識はありませんでした。もし、意識があるうちに、意識がなくなったら安楽死をしてくれと遺われたら、私には決断することができないと思います。安楽死を選択することによって、誰が幸せになるのか、誰が辛い思いをするのか分からないからです。答えの無い問いをずっと解き続けることになるでしょう。

現在、日本は少子高齢化社会です。安楽死したいと思う人がこの先もっと増えるかもしれません。

自分のためか、家族のためか、国のためか、会社のためか、はじめのためか、命を絶つ理由は人それぞれです。自ら命を絶つということは「人権」なのか。私たちは未来のために答えをつくらなければなりません。

「尊重しあふこと」

七ヶ宿町立七ヶ宿中学校 三年

おかびき
岡崎 よつば

「でも、あなたは恵まれてる方だと思うよ。」

これまで自分の悩みやつらいと感じていることを大人に話したとき、最後にこのように言われたことが何度かありました。

確かに私には家があり、家族がいて、着るものや食べるものに困ることもありません。学ぶことも遊ぶこともでき、自分の自由な時間もあります。

だから、私は自分を「恵まれていない」と思っているわけではありません。もちろん私たちのために一生懸命働き、何不自由のない暮らしをさせてくれる親への感謝の気持ちもあります。

でも、毎日の生活の中で「つらい」と感じることはたくさんあるのです。そして、その気持ちを誰かに聞いてほしい、わかってほしいという気持ちがあります。

そうすることで自分の考えをまとめたいと思うからです。

しかし、大人は、私が少し話しただけで、すぐに「それは、こうするべきだ。」と結論づけたり、「考え

ぎ。まだ子供なんだから、そんなこと気にしないでいいんだよ。」と言ったりし、最後には「あなたは恵まれている方だと思うよ。もっと大変な思いをしている人はたくさんいるんだから。」などと言うのです。

頭ごなしにそう言われると、私は自分を否定された気持ちになり、余計につらくなってしまう。そして、ストレスに押しつぶされそうになるのです。それは、私だけではなく、妹たちや他の子どもたちにも言えることではないかと私は感じています。

ある人は、大人に意見を言ったとき「子どもは大人の言うことを聞いてればいい。」と強い口調で言われつらかったと話していました。

また、ネットの書き込みなどでも「大人はすぐに自分の価値観を押しつけてくるから話す気がなくなる。」とか、「何でも『中二病』で片付けられる。」などの声を多く見かけます。

大人は私たちより経験豊富だから、私たちの悩みなんて小さなことで、すぐ解決できると思うかもしれませんが、私たちは、すぐに解決策を教えてほしいのではないのです。まずしっかり聞いてくれて、一緒に悩んでくれたり、少しだけヒントをくれたりしてほしいのです。そして自分で納得してどうするかを決めたいと思っています。

「それは少し甘えすぎでは？」そんな声が聞こえてきそうですが、人が「つらい」と感じることに重い軽いはないのではないかと私は思っています。「健康だから」「恵まれた環境にいるから」つらいことを黙って我慢してはいけないという考えは、その人を追い詰めてしまうのではないのでしょうか。

今の世の中では、人種差別や障がい者や高齢者への差別、LGBTへの偏見などがより問題視されるようになりました。偏見や差別に対する意識が高まり、社会的な動きとして、改善の方向へ向かっていると感じます。

また、『〇〇ハラスメント』という言葉も、色々な場面で聞くようになりました。

虐待などの重大な人権侵害ではないけれど、「子どもだから」で片づけてしまうことも、ある意味、ハラスメントのではないかと私は考えています。

偏見は差別を生み、人権侵害へとつながります。大人が「子どもだから」という偏見に気づき、意識して直してくれば、子どももいずれ偏見にとらわれない考え方ができるようになると私は思うのです。

そう考えているうちに、ふと、(あれ、こう考えると、今私が「大人は子どもの気持ちをわかってくれない」と思っていることも、実は偏見なのでは。)という考えが浮かんできました。そして、大人は子どもの気持ちを理解して当然という考えは、一方的で差別的な考え方ではなかったかと思ひ直しました。

思えば、私はこれまで大人の人に「つらいときにこんな風に接してほしい」とか、「考えるヒントがほしい」とか、自分の気持ちを素直に言ったことがなかったかもしれせん。

私のためを思って言ってくれたことなのに、ただイライラしたり、気持ちを伝えるのを諦めたりしていた自分は、偏見を偏見で返していたのではないかと気づきました。

人は皆、平等に人権を持っています。その基本は、健常であるかどうか、性別はどうか、年がいくつかなどで変わるものではないと思います。大切なのは、このことをいつも心に置いて、お互いを「尊重し合う」ことではないでしょうか。

私は、尊重を難しく考えず、まず、相手の話をしっかり聞いて受け止めることから始めようと思います。これを意識して、偏った見方ではなく、色々な面から物事を考え、判断できる人間になりたいと考えています。

そして、子どもの頃の気持ちを忘れず、子どもの目線で一緒に考え、互いを尊重し合える大人になろうと思っています。

楽天イーグルス賞

個性を大切に

美里町立不動堂中学校 三年

鈴すず木き ころろ

「女子なのに野球するんだ。」

私は小学二年生の時に、兄の影響で野球を始めて、今までずっとやってきた。始めた頃は、そこまで熱を注いでいなかったが、どんどん野球が大好きになり、楽しいものになっていった。私の生活の中心となり、多くの時間を野球に費やしていた。

他のチームと交流した時に「女子なのに野球するんだ。女子とペア組むの最悪なんだけど」と話しているのを見てしまった。女子で野球している人が少ないことの珍しさから出た言葉だったのかもしれない。しかし、今まで自分のチームに女子は私だけだったが、言われたことは無かったし、男女とか関係ないと思っていたから、ショックだった。また、聞いた瞬間は、理解するのも難しかった。野球が好きだったからこそ、私の存在を否定されそうな気がして、悲しかったし、つらかった。野球は、もともと男の子がするスポーツだったから、女子が野球するのはダメなのかな？女子だから、辞めるべきなのかな？女子野球チームだったくさんあるのに。大好きな野球が嫌いになりそうだった。そして、野球を手放してしまいそうだった。教

えてくれてた方々へなのか、野球をやらせてくれた両親へなのか分からないが、申し訳ない気持ちにもなった。

また、私はもともと、鬼ごっこをしたり、ドッジボールをしたりするのが好きで、ずっと外で遊んでいた。その時にも「女子なのにごいね」と言われた。言う人には悪気は無く、私が気にしすぎただけなのかもしれないが、私はとても傷ついた。でも、弱さを人に見せるのが苦手な私は、誰にも相談せずに一人で悩んでいた。

私は「普通」の女子と同じように生きようと努力した。周りに合わせて自分を主張しないように行動した。難しかったけれど、また言われないように色々考えて行動した。私はとてもつらかった。そこで、お母さんに相談したら、「そういう事を言う人も居るけど、自分らしく居て良いんだよ。」と言ってくれた。自分を認めてもらえたようで嬉しかった。心が明るく、軽くなった気がした。また、友達に話したところ、「野球してるのかっこいいよ。プレーを見ると元氣も見える。」と言ってくれた。嬉しくて泣きそうだった。応援してくれる人や仲間がいるのだと改めて知った。もっと早く相談すれば良かったなと思った。だから、これからは一人で抱え込まずに相談してみようと思った。

いまだに、周りの人から「女子なのに」と言われることもある。それに対して、今までの私だったら、きつと落ち込んでしまっていたと思う。しかし、今の私は、したいことをしているだけだし、悪い事はしていないから気にしないでよい、大丈夫だと思えるようになった。そして、自分の心に素直に生きようとも思えるようになった。

私はこれからも、夢に向かって頑張っていきたい。そして、素直に生きたい。もちろん、私の行動に対して、批判する人や私を良く思わない人もいるけれど、仲間に相談しながら挑戦していきたい。私に女の子らしさは無いかもしれないけれど、私は自分のしたいことをする。自分らしくありのままに生きる。そして、

これからも野球を続けていく。ずっと大好きだから。野球をしている時、夢に向かって努力している時が一番幸せで、一番輝いていると思うから。

もし、私と同じように苦しんでいる人が居るのなら、この体験を通して学んだ事を伝えていきたい。今度は、誰かに元氣を与え、励ましてあげられるようになりたい。そして、夢を応援できる人になりたい。

私は、性別によって、夢を諦めることがないような世の中にした。「女性なのに」「男性なのに」と言っていて、誰かの可能性や仕事を制限してはいけないと思う。性別で差別が起きないような世の中にした。男性と女性では、もちろん身体づくりなどの違いはあるが、性別の違いで生きづらさが、生じてしまうのは絶対にダメだと思う。どんな人だって、夢を持って良いし、夢に向かって頑張るって良いと思う。私はひとりひとり素晴らしい個性を持っていると思うから、その個性を出して、自分らしく生きていいと思う。私はみんなの個性を尊重できる人になりたい。そして、みんなも、それぞれの個性を尊重してあげられるようになってほしい。

誰もが夢に向かって頑張れる、みんなの個性が輝く時代へ。

その言葉は刃となる

石巻市立石巻中学校 三年

齋藤万桜

一年前、国語の授業で、物語を作ってみようという授業がありました。確か千五百字以上で物語を作って共有し、感想を伝え合おうというものです。作った作品は匿名で見るということになっていました。昔から私は小説を読むことが大好きで、いつか自分で物語を書いてみたいと思っていたので、国語の授業が本当に楽しかったです。

授業で作る物語は俳句を基にして作らなければならず、最初は俳句選びに苦戦しましたが、決まっただけ楽しかったのを覚えています。

そしてついに自分達を書いた物語がクラス全員に共有され、お互いの作品を鑑賞する時間がやってきました。私自身、他の人はどんなものを書いたのか楽しみでワクワクしながら読んでいました。しかしその楽しさは一瞬にして崩れ去ってしまったのです。

「この作品エグいて」

「気持ち悪っ！」

「なにこれおもしろい笑」

マイナスな、嫌な言葉が教室の男子達の中で飛び交ったのです。誰の作品について言っているのか気になつたので読むフリをして聞いてみると、私の作品を読み上げて笑いものにしていました。作品の一文を読み上げては笑ったり、文句を言っていたり、書いた文章を馬鹿にするように、冷やかすように言ったり私は生きた心地がしませんでした。その会話を聞いて羞恥心や悲しさに包まれて、何も考えられなくなりました。幸い、共有された作品は作者の名前が匿名（ニックネーム）だったため自分が書いたことはバレなかったのですが、

「もしバレて冷やかされたらどうしよう」

「陰で悪口を言われてたらどうしよう」

と考えてしまい、どんどん心が沈んでいき、冷や汗が出すぎて気持ち悪くなっていました。

その日帰宅して母親にこのことを相談すると、「あなたの作品は印象に残る良い作品だったから冷やかされたんじゃない？気にしないで。」と言われました。だけど私はそう思えず、言葉を消化できないままその日は眠りについたのですが、悪夢を見ました。内容は、なぜか私はインターネットに自作の小説を投稿してそれが炎上し、誹謗中傷を受ける夢でした。次の日の目覚めは悪く学校に行ったら冷やかされるんじゃないかと胸が苦しく、行きたくないと思いつながら登校しました。想像通り、ことあるごとに私の作品の一文を使って馬鹿にしたり、陰で沢山冷やかされていき、ついには国語の授業を休んでしまい、昼休み、スクールカウンセラーの先生に相談することになりました。私が小さな声でポツポツとただどしく話しても、言葉を拾い、相槌を打ってくれて、安心して涙が溢れ出して止まらなくなってしまい、その次の授業も欠席してしまいました。

その後、何回か冷やかされたり、馬鹿にされたりすることはあったものの、一週間が経つと自然に消えて

いきました。
今はすっかり聞かなくなりましたが、思い出すと鳥肌が立つし、今でも陰でからかわれていたら、と考えるとしまい学校にいづらくなってしまう。

この体験を通して私は、言葉は刃物という言葉の意味を改めて痛感しました。言葉は一度口から出ると、誰かを助ける優しい絆創膏にもなるし、誰かを傷付ける鋭い刃物にもなりえます。その刃物で心を刺された人は一生治らない深い傷を負ってしまい、可哀想だけではすまない話になる、と改めて認識し直し、言葉遣いやその場に合う発言をするように気をつけたり、困っている子を見かけたら話を聞いて相談にのってあげられるような安心できる人になろうと考えるようになりました。

「名前は知らないから言ってもいい」

「受け取る側の問題だ」

「どうせ知らない。私は悪くない。」

皆さんは一度はそう思ったことはありませんか。最近インターネット上で誹謗中傷の話をよく聞きます。しかしそれは立派な犯罪です。今回の私の出来事のように「名前が知らなければ何を言ってもいい」と思っ
て沢山悪口を言ったり書き込んだりしていませんか。自分の発言に責任を持っていますか。何回も言います
が言葉は何にでもなります。自分が良くても、受けとめる側がどう感じるかなんて分からないけど、悲しい
思いをすることだってきつとあるはずです。皆さんの今の言葉は誰かを傷付けていませんか。悲しませて
いませんか。逆に誰かからの言葉で傷付けていませんか。

一人でも多くの方がこれまでの自分の言葉を見直し、意識することができれば、みんなが楽しく元気に生
活ができるのではないかと思います。

審査員長賞

幸せのサイクル

学校名・学年・氏名

非 公 表

「歌っちゃだめ。」

これは私が言われた言葉ではない。私の大好きな友達と言われた言葉だ。その子は障害を持っている。コミュニケーションを取るのが少し苦手で、時々気になったことがあると盲目になってしまう。そんな彼女は、毎年合唱コンクールの時期になると先生や友達に、

「しーっ。我慢、我慢。」

と言われている。もちろん、先生や友達は悪気があって言っているわけではない。彼女は周り合わせて歌うことが難しく、気持ちが高ぶると大声で歌ってしまうときがあるからだ。みんなも彼女にも目一杯歌わせてあげたいけれど、クラスの合唱のためにもこれは仕方のないことだと思っている。私もこればかりは仕方がない、と思うようにはしているが、毎年この時期になると、心がモヤモヤする。「仕方がないこと」で片付けてしまってもいいのだろうか。私は決してそう思わない。一人でも歌わないと合唱に対する気持ちが欠けてしまう。気持ちとは一人一人が持つ心。つまり、「人権」に直結することだと考えた。

彼女は歌うことが大好きだ。そのことを知ったのは中学一年生のときの梅雨のある朝。彼女が、音楽が好きと話してくれて私が、

「私も音楽好きだよ。同じだね！」

と言ったらニコッと彼女が笑ったのを今でも覚えている。その日は雨でどんよりとしていたが、彼女の笑顔を見て私は、心の中に光が差したような、スッキリとした気持ちになった。そんな彼女がなぜ歌うのを我慢しなければならぬのか。私は未だに理解できていない。一年生の合唱コンクールでは彼女はとても楽しんで大きな声で歌っていた。だが、今思えば周りの人はきつと歌いづらかっただろう。彼女が歌えば彼女は楽しいが、その分周りは歌いづらくなる。この二つの気持ちを天秤にかけて結果、彼女はそれ以来歌うのを我慢するようになった。もちろん、今年の合唱コンクールも彼女は歌うのを我慢するよう言われていた。その時は伴奏をしたので母が撮ってくれた動画で彼女を確認した。やはり初めは我慢して口をムツと食いついていたが、途中から楽しくなり口をパクパク動かして歌っていた。その時、先生に言われたように隣の友達は彼女にトントンと合図をして抑えるよう指示をしていた。彼女は再び口をムツと閉じた。胸が苦しくなり見ていられなかった。私はどうしても彼女に楽しく歌ってほしかった。それくらい彼女の笑顔が大好きだからだ。だが私は彼女の障害の病名すら知らない。いや、知ろうとも思わない。それは興味がないからではなく、私にとって普通の友達だからである。周りと合わせるのが少し苦手なだけでその他は私たちと同じ普通の人。

ある日彼女は他の子が気になり話しかけに行った。しかし、相手の肩をトントンとする力も加減が分からず、強く叩いてしまうことがあるのでその子は驚き、おどおどしていた。私はその時、きつと彼女にもその「動揺」が伝わってしまったと不安に思った。そう感じた瞬間、私は母との会話が脳裏に浮かんだ。私はいつも彼女の笑顔が見れて嬉しく思うと同時に、なぜこんなに話してくれるのだろうかという疑問に思い、母に聞

いたことがある。私の母は昔保育士をしていたので障害など福祉に関することはよく知っている。そんな母はこう答えた。

「きつとあなたが素で楽しそうに話してくれるからだよ。この人なら大丈夫って感覚で分かるんじゃない？」

と言っていた。予想外の答えだった。もつと専門的な言葉を言うのかと思ったら、「素」「感覚」とどれも普通だった。だが、母の言う通りかもしれない。彼女達のいちばんの望みは「素の心」。着飾るような優しさや動揺はいらない。彼女達はただ、普通の、そのままの心に触れたいんだ。

これらの体験を通して私は、互いの人権を尊重し、両立させるには「素の心」が大切だと考えた。彼女の歌声を素の心で受け入れ、私たちはありのままの歌声と一緒に歌う。それこそが本当の在るべき姿なのではないだろうか。互いが幸せになるなんて欲張りかもしれない。そんなの不可能かもしれない。そう思っている人に伝えたい。

「素の心で接することは、相手の心に直接寄り添え、互いの幸せに繋がるということ。」

もしかしたら素の心が対立する場合もあるかもしれない。だが、素をぶつけ合うことは自分の人権を主張し合うことで、それを乗り越えた先にはきつと「主張」が「尊重」へと変わっていることだろう。私は将来、小学校の先生になりたいと思っている。将来は素の心で接し、生徒一人一人の心に直接寄り添えるような先生になりたい。そしてそれが互いの幸せへと繋がり、幸せが連鎖していくような、素敵なサイクルを作れる人になりたい。

大切な理解

学校名・学年・氏名

非 公 表

「自己紹介」。新しく出会う人たちと、お互いを知るために行う、ウキウキする春の恒例行事。しかし、この言葉を聞くと私はいつもドキドキする。なぜなら私は吃音症だからだ。吃音症というのは、発声の最初の音を繰り返す、もしくは伸ばす、または言葉が出ないという症状を指す発話障害の一つである。また吃音のことを吃るともいう。私は、家族と話しているときや友達と話しているときは、あまり吃ったりはしない。しかし、人前で話すとなるとどうしても緊張してしまい言葉が出にくくなってしまふ。吃音症には確立された治療法というものはまだ存在していないという。私は「連発」(お、お、お、おはよう)や「伸発」(おーはよう)では無く最初の言葉がでない「難発」(・・・おはよう)という症状がある。

私は幼い頃から吃音症を持っていて、小学校では先生にも吃音のことを話し、高学年のときに、スクールカウンセラーの人に少しお世話になっていたことがあった。小学校を卒業するまでは、特にこれといって吃音症で苦労したことはなかった。出しにくい言葉があったりしても自分なりに言いやすくなるように工夫して喋っていた。

小学校を卒業し、中学校に入学して、不安はありながらも楽しい学校生活をスタートした。しかし、学校が始まって数日たったある日、私は、その日は日直で朝の会の号令をしなければならなかった。吃ったりしたらどうしようという不安もあったが、いつも通りに「ありがとうございます」と言おうとした。なぜだろう、最初の「あ」が出てこない。たった十一文字なのに。頭の中にもある、なのに言えない。みんなが私の方を向いている。「どうしよう、みんなを困らせちゃう」と思いながら、今にも涙が出そうだった。そのとき幼馴染だった女の子に

「代わりに言おうか？」

と、声をかけてもらって、助けてもらった。私は朝の会が終わったあと、悔しさと、なんであのかき頭の中にあつた「ありがとうございます」の言葉が出て来なかったのか、頭の中が混乱し我慢できず、思わず泣いてしまった。担任の先生から、

「落ち着くまで違う部屋にしようか」

と言われ、みんなと違う部屋に行った。そのとき先生が優しく接してくれて、その優しさのせいか、私はなかなか涙が止まらなかつた。そして先生は、私と会話をしてくれた中で、「このことをみんなにちゃんと説明しておくね」と言った。私は、とても安心した。しかし、それと同時に少し怖さや不安もあった。みんなからなにか言われないか、変な目で見られたりしないか、などと色々と考えてしまった。時間がたち、気持ちも落ち着き部屋から出て廊下を歩いていると、奥から友達の姿が見えた。すぐに私のところに駆け寄ってきて、

「さっきは大丈夫だった？」

など私を心配する言葉をかけてくれてとても嬉しかった。教室に戻っても何も言われず普通に接してくれて、みんなはなんて優しいんだろうと思った。

それから私は楽しい学校生活を送った。友達に吃音のことを話したからか少しだけ、前よりも話しやすく

なった。それでもやっぱり悩んだりすることはまだたくさんある。それでも、みんなが私のことを受け入れてくれた、そして理解してくれたから安心して話せるようになったと思う。

「なんで自分だけこんな辛い思いをしなくちゃいけないの」。前の自分も今の自分も、どちらも同じことを思っているだろう。けれど世の中にはもつと苦労している人がたくさんいると思う。顔には出さなくても悩みを抱えている人もいるかもしれない。そんな人たちのことを放っておくのではなく、話を聞いてあげただけでも、その人の心は少しだけ軽くなるはずだ。相手のことを理解し、そして一人ひとりがその人のために向き合うことが大切だと思う。私が周りの人にももらったように、私も誰かを支えられる人間になりたいと思う。

仙台市中学校長会賞

私が目指す社会

仙台市立五橋中学校 三年

日く下さ柚か奈ゆず

あの人は〇〇だから。〇〇してあげないと。今、私たちの社会では、共生社会や多文化社会などを目指すさまざまな取り組みが行われています。しかし、実際に自分が接する際、障害をもった方や外国の方へのあつ程度の偏見、してあげているというような自分の自己満足や上から目線な考えをもつ人が、少なからずいるように思います。また、困っているように見えても見えて見ぬふりや、そもそも気にしないといった人が一定数いるのが現状です。

私は一昨年の秋、友達と学校から帰るときに、車いすにのつた女性が道路の段差に苦戦している場面に遭遇しました。私は少し気になり、立ち止まって声をかけようか悩んだのですが、友達に

「あの人に声をかけても、強く断られるだけだよ。私もこの前そうだったし。」

と言われ、声をかけずにその場をはなれました。今思えば単なる言い訳にすぎないけれどあのときの私は、声をかけても迷惑なら止めた方がいいよね、と自分に言い聞かせ、少しモヤモヤが残りながらも自分を正当化して、そのまま家に帰りました。私のこのときの行動はただの見て見ぬふりで、私たちが目指す社会とは

程遠い考えでした。

それからしばらくたった昨年春、私は軽度の光線過敏症を発症してしまい、長時間の野外での活動や、晴れている日の外での体育などが厳しくなりました。軽度ではあるものの、紫外線を浴びると、かぶれたように赤く、痛くなってしまう、対策をしても大変です。ある体育の長縄の授業中、その日はとても晴れていて、私は自分が跳ばない時間は日陰で待機していました。ただ、周りの人からしたら、さぼっていたりやる気がないように見えているのではないかと、と少し不安でした。そろそろ戻ろうかな、と思ったとき友達が一人居る人日陰の方まで来て、

「大変だね。何かできることあればいつでも言ってみてね。」

と言ってくれました。その友達にとっては些細な会話の一つだったかもしれませんが、でもその言葉は、周りを気にしていた私にとってとてもうれしく、心が軽くなった一言でした。直接何かをもらったわけではないけれど、周りを頼ってもいい、という環境を作ってくれたその友達に、私は本当に感謝しています。そのとき、ずっと心にひっかかっていた車いすの女性のことが頭に浮かびました。声をかけた友達を断つたのは、迷惑をかけてしまう、周りを頼るのが怖い、と思ったからなのではないか。その女性があのときどう思っていたのかは、私にはわかりません。しかし、段差に上がれずとも困っていて、周りに助けを求めたかったとしたら。私たちのあの行動は、手伝ってほしいと思える環境を作ることができていたでしょうか。考えてみると、今までの私はただ自分の行動にいろいろ言い訳をつけて正当化し、自己弁護しているだけでした。実際、インターネットのとある記事では、車いす利用者の方が困ることとして、ちょっとした段差や障害物があると前に進むことができない、というように挙げられていました。今さら後悔しても遅いけれど、断られるかもしれないと分かっていたとしても、やはり一度声をかけるべきだったと思います。

このように、今の私たちの社会では、誰かの手助けを必要とする人が少なからずいる一方、実際は私のように見て見ぬふりをしてしまったり、ちょっとした見た目の違いで偏見をもってしまったり人が数多くいます。私はあの出来事の後悔を胸に、互いに助け合い、誰もが過ごしやすいと思える社会を目指していきます。そのためにも、周りを頼ることができるといえるのはとても重要なことと考えます。一人一人の少しの気遣いが積み重なることで実現するため、まずは偏見にとらわれずに相手を理解すること。そして、手助けしてあげることは特別なこと、偉いことだと思わずに、授業で分からない問題を教え合うのと同じように、困っている人に手を貸すのは当たり前だと捉えること。このような考えを全員がもつことができたなら、そのときは、誰もが過ごしやすい、笑顔あふれる温かな社会が実現できるはずです。自分ができることを少しずつ。このことを意識しながら、今後過ごしていきます。